

「湿地の文化」と地域づくりを支える「教育」にかんする研究(その1)

～福島県檜枝岐村にそくして～

○佐々木美貴(日本国際湿地保全連合)

miki_sasaki@wi-japan.org

はじめに

尾瀬国立公園の約半分が属する福島県檜枝岐村は、人口600人弱で、限界集落に見みえるが、全国から村出身者の配偶者や、Uターン、Iターンの人に来て、子どもも増えている。この要因は次の3点にある。①1970年代以後、人々が生きるための主産業を、木工業や出稼ぎから、尾瀬や歌舞伎、スキーを中心とする観光に切り替え、湿地の文化を創り出してきたこと。②そのために、湿地保全の文化を育ててきたこと。③「結(ゆい)」を基盤として、人々が互いに学びあい育てあう「教育」を進めてきたこと、である。

地域づくりにおける湿地の活用

沼田街道が通る尾瀬は、江戸時代から交易の場であり、明治時代から岩魚釣りの場になり、昭和の尾瀬訪問客の増加に伴い、ハイキングと登山の場となった。釣り小屋を基盤に山小屋を作り、1960年代には村直営の御池ロッジ、尾瀬沼ヒュッテを建て、1973～75年に温泉を掘り温泉浴場を建設、全戸に温泉配湯をした。また河川の水質浄化のため、75年にはし尿処理施設を作り、現在、下水道普及率100%である。さらに、長野から学んで、1990年に岩魚養殖施設を作り、岩魚、山椒魚、熊、山菜、裁ちそばを使った「山人料理」を創り、1999年には、尾瀬に行けない人も尾瀬の雰囲気味わえる、ミニ尾瀬公園を開園させた。

檜枝岐村における湿地の文化の分類

尾瀬をふくむ村で活用されている「湿地」は、湿原、湖沼、川、雪原、水路・上下水道システム(用水路と排水処理区域)などである。ワイズユースの文化には、全戸に供給される温泉や岩魚養魚場、狩猟からスポーツに広がったスキーの伝統、尾瀬の観光などがある。保全では、大江湿原のシカの食害対策、下水道システム整備、国立公園内のトイレと廃水処理、CEPAでは、スキー部の伝統や、環境省と村の協力による「尾瀬から見た檜枝岐」の展示などがある。

人を育てるしくみとしての「結」

檜枝岐村の取り組みの担い手が育つうえで、外からの人や情報、技の取り込みと共に、「結」が大きな役割を果たしている。昔は、家の建て替え、屋根のふき替えの結があった。現在は、青年団、消防団、商工会の青年部・女性部、檜枝岐歌舞伎の「座」、スキー部の先輩・後輩関係、会津若松における村立の高校生寮などがある。「結」の共同生活と作業によって技が引き継がれ、協力して作業をやり抜く力をつけることが人を育てあう「教育」の基盤となっている。

キーワード：湿地の文化、地域づくり、結、教育